



県民文化祭阿蘇「サウンド・イン・阿蘇」に向け練習に熱が入る浅尾さんとバンドのメンバー。(久木野村・アスペクタにて)



県民文化祭

昭和62年に熊本で開催された第2回国民文化祭を契機に始まった県内各地域持ち回りで開催される文化の祭典。

県民の文化活動への積極的な参加と相互交流を促進し、熊本らしさを生かした文化の振興、さらには新たな文化の創造を図り、県民の豊かな生活の実現をめざしている。

〈主催〉 熊本県、熊本県教育委員会、熊本県文化協会、地元実行委員会

〈開催状況〉

年月	開催地	開催テーマ
第1回 S63.10	八代市	火の国の未来を拓く八代文化
第2回 H1.10	玉名市	21世紀を拓く菊池川流域文化と玉杵名の里
第3回 H2.10	本渡市 牛深市	海と空と人のふれあい

第4回県民文化祭阿蘇の概要

会期 平成3年10月19日(土)～10月27日(日)9日間
会場 阿蘇郡12町村各会場
テーマ 阿蘇ルネサンスー「天・地・創・造」
～大自然に育まれた文化の競演～

第5回は水俣市を中心に平成4年に開催される予定

※第4回県民文化祭阿蘇についてくわしくはINFORMATIONをごらんください。

本当に楽しめることは
自分たちの身近にある

CULTURE

副知事

八千代座の発足自体は、一種の地域づくりという面があったんでしょう。

戸澤

明治の終わり頃、山鹿は県下二番目に栄えていた町で、旦那衆に経済的余力があったんですね。それで、山鹿に買物に来ていただく恩返しということと、当時の文化・芸能にふれてもらおうと、八千代座を建築したわけです。

副知事

戸澤さんたちが今やられていることは、ルネサンスみたいなものですね。

浅尾

僕らと同世代の人たちは、どうしても都会に憧れてしまう。それは、そこに何かがあるというより、ただ単に、簡単に楽しみが取り入れられるからじゃないんでしょうか。でも、本当に楽しめる事っていうのは、自分たちの身近なところにあるんじゃないか。それは、あるきっかけがないと分かってもらえない。で、そのきっかけを一緒に作っていくじゃないか、というふうなことをやっているんです。

浅尾

僕ら、学生の時に音楽に携わってきても、今はなかなかやれないという人が結構多かった。じゃあ、何かおもしろいことをやろう、と阿蘇の全域を回ったんです。そうすると、いろんな人たちがいる。それで一緒にやりましょうと、小さいイベントから、自分たちだけの小さいコンサートから、いろんなことをやっていった。そして今の状態です。

猪本

私、この対談で一番最初にお話ししようと思ったのは、「お礼を言いたい」



CULTURE

日曜日のギターをつまびき
それだけでも人生が明るく

副知事

ありがとうございます。

私、文化について辞書をひいてみたところ、「学問、芸術、宗教など人間の精神的諸活動の産物」と書いてありました。そういうことになると、私はどちらかというと頭を使う方は苦手な人ですよ。(笑い) 体を使う方が性にあっていて。しかし、スポーツも人間の知的活動が肉体的な行動と一つになって生まれた文化といえる。音楽にしても、技術だけではない。どう開拓して、どう音として表現していくのか、そこらへんに重点がよりおかれている。そうして音楽というのが芸術になっている。

戸澤

それが、あまりなかったんですよ。一枚の写真がきっかけで、その写真を見た玉三郎さんが「これはおもしろいね」ということで、じゃ行ってみよう。

私は、三十才になってからギターを習い始めたんです。ものにはなりませんが、それでも日曜日なんか時々初歩のアルペジオ、そのとこだけをやります。精神的活動と言えませんがどうか、ただそれだけでも自分の人生を明るくしてくれてるんじゃないかという気持ちは持っています。

ところで、戸澤さん。八千代座の玉三郎公演には大変なやりとりがあったんじゃないでしょうか。

三郎公演には大変なやりとりがあったんじゃないでしょうか。

うか、と。

八千代座は、建造物としての素晴らしさと、劇場としての素晴らしさについて語られますが、私たちには後者の方はよくわからない。それが、玉三郎さんが写真を見ただけで「これはすごい」とすぐ来られたことで、みんな、これは本当にすごいんだなと。ですから、建物として、ハードの保存ということからはじまりましたが、劇場として活用しながら残していくということになり、昨年の公演になったんです。決して町おこしのためとか、観光資源にしようとか、そういう意識じゃなかったんですよ。



八千代座を核に町づくりを推進する山鹿市の若手リーダーたち。戸澤さんを囲んでの話にも活気が感じられる。(山鹿市・八千代座にて)